

男女の考え方の違いと原因について

3年3組 55班

研究要旨

文献やインターネットで、脳の性質の違いによる男女の考え方の違いについて調べた。脳の性質は男脳と女脳に分かれ、それぞれが異なる特徴を持つことが分かった。男脳は論理的思考に優れている脳であるが女脳は共感性に優れている脳であり、二つの脳のタイプに分かれる原因は、文化的要因と生物学的要因の二つがお互いに混ざりあった結果として生まれることが分かった。

また、アンケート調査で本校文系の生徒の男脳と女脳の割合を調査した。その結果、思春期の男女が持つ脳のタイプはどちらか一方に偏りがあるのではなくまばらであったため、女性が女脳、男性が男脳というわけではないということが明らかになった。

キーワード 男脳、女脳、論理的思考、共感性

1. 研究の背景と目的

近年、離婚する夫婦が増加している。その原因としては夫婦間の意見の食い違いがあげられる。また、現代では女性の社会進出も進み、男女間のコミュニケーションやお互いの理解がより一層求められるようになった。そこで男女の考え方の違いやその原因について、文献資料やアンケート調査をもとに調べ、今後の離婚問題や社会の中で良好な人間関係を築くための方法を模索した。

① 先行研究

今日の脳科学研究では、脳は2つのタイプに分類されることが分かっている。それが男脳と女脳である。

男脳は左脳優位の脳であり、1つのことにこだわる「オタク脳」とも言われている。この男脳は、システムを理解し構築する論理的思考をする際に優位に働く。

○男脳の特徴

- ・論理的思考…確率、法則、経験などを踏まえて考える。
- ・直線的思考…会話や話の流れを直線的にとらえて進めようとする。
- ・問題解決型…一直線に話が進むため、その途中で出てくる問題にはその都度処理し解決しようとする。

女脳は右脳優位の脳であり、イメージや感情・人間関係をととても大事にする脳であることから「きずな脳」とも呼ばれる。この女脳は、他己との共感能力に優れ、複数のことを一度に処理することができる。

○女脳の特徴

- ・同時並行的思考…相談や話題が多く、いろいろな問題を一度に処理する。
- ・感情充足型…快や不快といった感情を満たそうとすることが多い。

・新発想取込型…様々な考えを取り入れやすい女脳として新たな発想を生む機会に恵まれている。

②仮説

先行研究より、ヒトの思考や行動の違いは、各個人が持つ脳のタイプ、男脳と女脳の割合の違いによるものであることが分かっている。そこで私たちは、どのように男脳と女脳が発達してきたのか、その原因について以下のように仮説を立てた。

- ・男脳…昔の生活の中で、男性の仕事は主に狩猟であったため、物事を効率よく処理し合理的に考える機能が発達したと考えられる。
 - ・女脳…昔の生活の中で、女性の仕事は主に家事や育児であったため、同時に複数の仕事をこなせるようになり周囲との共感性に優れた機能が発達したと考えられる。
- ・人格形成が行われる思春期の男女では、個人の持つ男脳と女脳の割合に散らばりが見られるのではないか。

2. 研究手法

- ・文献
- ・インターネット
- ・アンケート調査（豊田西高校第3学年文系：男子50人、女子50人）
…以下の20個の質問項目について自分がAとBのどちらに当てはまるか、というアンケート調査を行った。

	A（男脳の特徴）	B（女脳の特徴）
(1)	内容のない会話はしたくない。	お喋り自体が楽しい。
(2)	口喧嘩になると口数が減る。	口喧嘩になると口数が増える。
(3)	人の好き嫌いが曖昧である。	人の好き嫌いがはっきりしている。
(4)	年齢とともに言動が丸くなった。	年齢とともに言動がパワフルになった。
(5)	買い物の際、目的もなくブラブラしたくない。	目的なくウィンドウショッピングするのが好き。
(6)	友人たちと一緒に行動していてもトイレは1人で行く。	友人たちと一緒に行動していたらトイレも誰かと行く。
(7)	ボディタッチされると相手を意識してしまう。	相手を意識するとボディタッチしてしまう。
(8)	別れた相手を長く引きずりやすい。	つらく悲しい別れでも1年以内にリセットできる。
(9)	いつまでも自由でいたい。	ちょっとは束縛されたい。
(10)	いつも自分で決めたい。	時には相手に決めてほしい。

(11)	自分の存在意義を示すために意地を張り面子を守ろうとする。	自分が幸せだと感じられれば十分である。
(12)	何かを説明する際に、きちんと話さなければならないと責任感を抱く。	何かを説明する際に、相手に伝わるかどうか不安になる。
(13)	長い話を避け、話をまとめたくなる。	余計な話をして、長い時間話してしまう。
(14)	今まで築いてきた社会的地位をなかなか捨てられない。	今まで築いてきた社会的地位をわりときっぱりと捨てられる。
(15)	何かをするときの原動力は、使命感である。	何かをするときの原動力は、他者貢献である。
(16)	大きく壮大な目標であるほど意欲がわく。	小さく具体的な目標であるほど意欲がわく。
(17)	優しくされ、許してもらいたい。	愛され、大切にされたい。
(18)	失望されるのが怖い。	拒絶されるのが怖い。
(19)	そっとしておいてほしい。	感情移入してもらいたい。
(20)	会話において、問題解決などの目的を達成しないと満足できない。	会話において、話せばすっきりし満足できる。

3. 結果・考察

【脳の性差を生む要因】

①性役割の固定化（文化的要因）

・私たちは男性、女性のそれぞれに異なる固定観念を抱いており、その観念がどのような行動を取り、何に関心を持つかを決めてしまうということ。たとえば、女性は「共同体中心的」（利己的でなく、他人への思いやりがある）で、男性は「作動的」（自己主張が強く、拡大主義的で、支配欲が強い）という固定観念がある。このような観念は、男性、女性がそれぞれ異なる社会的、経済的役割を担っていることから生じるとされる。女性は家庭や子育てに深く関わっていることから、より共同体中心的になり、男性は雇用されて報酬を得ることに携わっているため、自己主張が強くなる。

性役割説の矛盾点

・存在するすべての社会において同じような性差が見られることを説明できない。

（例）ある社会では、武器の製造（システム化が必要な技術）に男性だけでなく女性も携わっているため、男性と女性が異なる社会的、経済的役割を担っているといえない。

②ホルモンによる影響（生物学的要因）

・遺伝子型による性別は受精の瞬間に決まり、それがそのまま定着する。普通、男性か女性かの区別をする場合は、この遺伝子による判断で行われる。しかし、遺伝子型や生殖器は女性であっても、生殖腺が男性として機能し、脳のタイプ

が男性になり、行動にも男性的な特徴が表れることもある。反対に、遺伝子型や生殖器は男性でも、生殖器が女性として働き、あるいは女性の脳を持ち、女性的な行動を取る場合もある。そして、脳のタイプや行動の特徴がどう決まるかには、胎児期におけるテストテロンーアンドロゲン（男性ホルモン）の一種ーというホルモンが重要な働きをしている。

＜胎児期のホルモンによる影響に関する実験＞

・妊娠第一期（妊娠3か月まで）に羊水検査を受けた母親から生まれた子供を対象に、羊水内のテストテロンの濃度と子供の特徴について調べたところ、胎児期のテストテロン値が低かった子供（女の子に多い）はアイコンタクトをよく行い、語彙が多いことが分かった。逆に、胎児期のテストテロン値が高かった子供（男の子に多い）ほどアイコンタクトを使う頻度は低く、語彙も少なかった。

・アイコンタクトやコミュニケーション能力が初期的な共感の表れだとすると、この結果から、胎児期のテストテロンの値が個人の共感傾向に違いを生む重要な生物学的要因であるといえる。

・その後、この子供たちの追跡調査を行ったところ、胎児期のテストテロン値が低かった子供は、高かった子供に比べて人間関係を築く能力が高く、興味の対象が広いことが分かった。

・この結果から、胎児期のテストテロン値が低い場合は、共感能力（言語能力、コミュニケーション能力、アイコンタクト、人間関係を築く能力など）に優れているといえる。

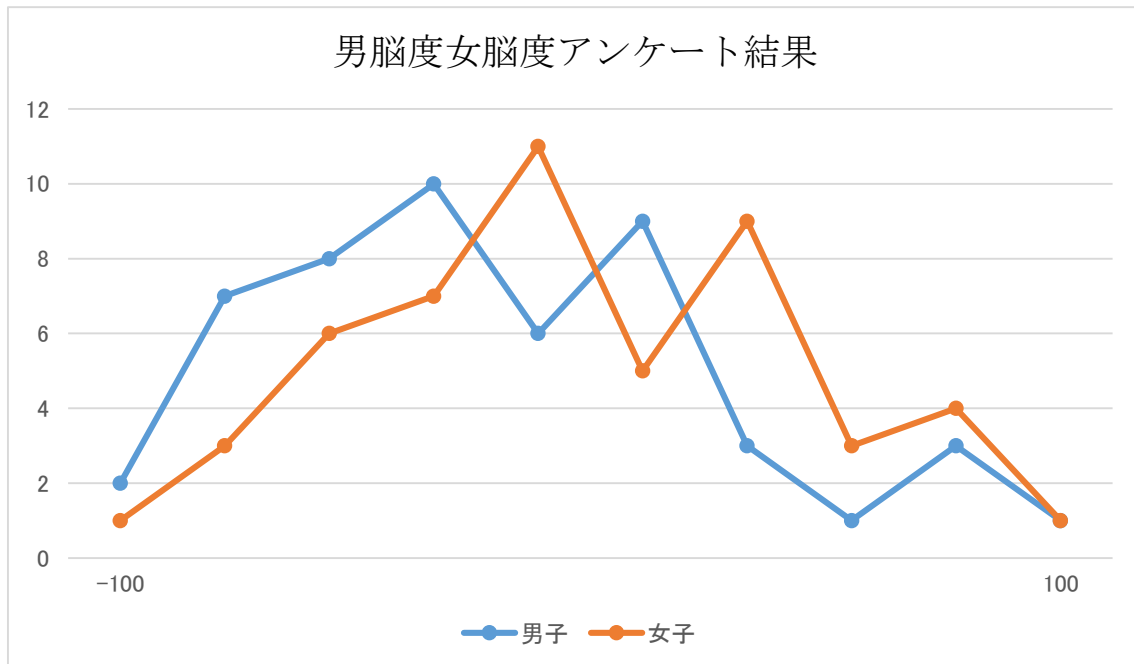
ホルモン説の矛盾点

・脳の性差を左右するホルモン（テストテロン）の分泌量が高ければ高いほどシステム化傾向が強くなり、低ければ低いほど共感性に富むというわけではない。

むしろ極端に偏ってしまうと、一般的な状態よりも能力に欠けてしまう場合がある。

（例）アンドロゲン不感性（A I）症候群、C A H（先天性副腎過形成）など。

【アンケート調査（豊田西高校第3学年文系クラス：男子50人、女子50人）】



* マイナスの値が高いほど男脳度が強く、プラスの値が高いほど女脳度が強い

【結果からわかったこと】

- ・ 男子はやや男脳より、女子はやや女脳よりである。
- ・ 人格形成が行われる思春期は、男脳と女脳がまばらであり広範囲に散らばっている。
- ・ 男子でも女脳の割合が強い人もいれば、女子で男脳の割合が強い人もいるため、男は男脳、女は女脳であるとは言えない。

4. 結論・展望

男女の考え方の違いは個人が持つ脳の性質によるものであり、その性質を決める要因として、文化的要因と生物学的要因がある。文化的要因は、私たちがもともと持っている男性、女性への固定観念によるものである。その固定観念は、日々の社会的または経済的役割として、男性は社会に出て働きその報酬で自分の家族を養い、女性は家庭や子供、近隣の人々と深く関わる、というそれぞれが違う役割を担っていることによって形成されたものと考えられる。生物学的要因は、胎児期に母親の子宮内で分泌されるホルモンの量によるものである。母親は、子供が胎児期のころに子宮内でテストテロン（男性ホルモン）を分泌する。このテストテロンの分泌量が低かった子供ほど、成長するにつれアイコンタクトをよく使い語彙力も多かったことから、共感性に優れていると考えられ、このテストテロンの分泌量が脳の性質を大きく分けているものだと分かった。そしてこの脳の性質の違いは、文化的要因と生物学的要因のどちらか一方のみによって左右されるわけではなく、相互に混ざりあった結果として決定されるものであると考えられる。

また校内で行ったアンケート調査から、以下の3つのことが分かった。1つ目は、総合的に見て男子はやや男脳より、女子はやや女脳よりであるということ。2つ目は、男子の中で女脳度が高い人もいれば、女子の中で男脳度が高い人もいる

ということ。3つ目は、人格形成が行われる思春期では、男脳と女脳のどちらか一方に偏ることなく脳の性質はまばらであるということである。このような結果から、脳の性質について、男性は男脳を持つ傾向が高く女性は女脳を持つ傾向が高いが、完全な男脳や女脳を持つ人はごくわずかであると考えられる。

しかし上にあげたように、性役割説（文化的要因）にもホルモン説（生物学的要因）にも矛盾点があり、あくまでこれらの説は一例に過ぎない。したがって、異文化を持つ国やより多くの世代の人のデータをとり、それらを比較しながら、今回出たような矛盾点を解明していく必要がある。またホルモン説の中であげたように、テストステロンの分泌量が低ければ低いほどシステム化傾向（論理的思考）が強くなり、高ければ高いほど共感性に富むわけではない。逆に、一般的な状態よりもその能力に欠けてしまうこともある。このことから、先天的に持って生まれた障害はホルモンと大きな関わりを持っており、胎児期に受けるホルモンの種類や量、作用する器官や作用の仕方などを研究することが、それらの障害の仕組みを解明することに繋がるのではないだろうか。

今回の研究によって、男脳と女脳の特徴には根本的な違いがあることが明らかになった。アンケート調査の結果から、必ずしも男性が男脳、女性が女脳という思考を持っているとは一概には言えないが、一般的に男性は男脳より、女性は女脳よりであるため、男女の考え方に違いがあることを理解することは、近年問題となっている離婚率の多さ、つまり夫婦間のすれ違いの改善にも役立つだろう。この理解によって、男女がお互いの考え方を認め合い、話し合いの際の衝突も減ると考えられる。また男女の思考の違いを理解することで、会社内における男女の関係もより良くなるだろう。男性の優れているところと女性の優れているところを上手く利用すれば、今まで以上に良い結果を生み出せるかもしれない。女性の社会進出が求められている現代で、男性と女性がどのように関わりあっていくかが重要となる。お互いを尊重していくことが今後家庭的にも社会的にも必要となっていくだろう。

5, 引用・参考文献

サイモン・バロン＝コーエン, 三宅真砂子 (翻訳) (2005) 『共感する女脳、システム化する男脳』NHK出版 (Simon, Baron-Cohen, 2003, *The Essential Difference Basic Books*)

茂木健一郎 (2014) 『男脳と女脳人間関係がうまくいく脳の活用術』 総合法令出版

一般社団法人, 全国行動認知脳心理学会 2017

【男脳女脳診断】自分は男脳？女脳？違いや特徴を解説！ 2017年7月10日
<http://woman.bp-labo.com/communication-139/>